



^ 13  
3567  
9



門 13  
號 3567  
卷 9

近世説美少年録第二輯卷之四

東都 曲亭主人編次



第十面  
校豎利を説く季孟と和く  
墨吏勢を肩て役夫と磨る

話表柳本彈正忠國友の日毎の出頭時めて服を脱身と宿所へも請来  
ぬる人々の名簿苞首の言ふ所をせよとせむせんともたまく家に在りける  
折執達の若黨が速く主の身邊お來る香西殿のあ使未松珠之奴  
と名告むるの拜謁を請ちあぬ計ひおうせんやと告ぐと國友ええとて  
兄あつら快らぬ耐殿元盛の使うる對面して何れせん且その末意を語ねよと  
いふ若黨あるる客房のくお赴たる程もあつらぬとて來て則御意の  
趣も彼れん使おゆえ知くと稟するあつらぬとて此もつら引來せ

美少年録二輯卷四

竹翁軒藏

早稲田大學圖書館  
昭 34.6.3 焚  
藏 書

る。否一大事の議はわれが傳へ述ぐ。見参許しぬが御主君  
 めん為と申すは、おのれと報は、困友冷笑を情剛に怒り、直魂を  
 さとあらん幾十歳許の男と、回へ若黨さ、年尚二八可事女子あてを  
 け、美少年あて、困友眉を擡め、實の大事の使を、出頭老  
 黨の、母を死せる、相成る、小孺子の、いひを、いひく、許し、然れ  
 とく、猶ありとの、憶い、けり。と、あられ、若共、來を、呼、立、近習二名を、後へ、  
 童扈、後、大刀、持、出、珠之、女、對面、を、登、時、未、松、珠、之、女、の、携、來、る  
 一包の湯鉢を、傷、措、困友、を、え、も、膝、ひ、け、る、の、ま、く、額、を、も、は、た、る、  
 自若とく、在り、困友、怒、る、声、高、く、は、け、り、尉、殿、の、使、を、京、師、も、近  
 屬、事、言、く、て、肝、食、宵、衣、を、被、る、ま、も、公、務、を、ま、の、身、の、任、と、ま、る、れ、使、者、の  
 わ、な、に、眠、る、け、れ、と、大、事、の、一、議、を、い、の、枉、く、對、面、と、許、せ、ぬ、氣、の、奉、勤、奇

怪、憶、は、汝、の、乳、臭、に、小、孺、子、の、分、際、で、主、の、使、と、よ、せ、ぬ、あ、る、必、く、兄、の、猛、  
 病、痾、を、犯、さ、れ、る、乱、心、の、沙、汰、を、一、愛、無、る、を、敦、圍、て、ま、身、を、起、一、席、を  
 跟、立、く、魚、入、ら、ん、と、ま、程、小、珠、之、女、の、衝、と、寄、り、袴、の、裾、を、引、り、先、き、刀、禰  
 要、時、等、せ、ま、在、下、刀、禰、を、侮、り、并、き、の、遲、延、を、今、目、前、の、利、を、以、  
 る、小、同、胞、睦、を、あ、ぬ、と、歎、く、の、あ、ま、の、礼、違、ひ、く、不、敬、の、罪、を、為、る、を、在、下、不、肖  
 る、の、へ、も、賤、者、を、貴、人、と、敬、可、の、礼、儀、の、知、れ、介、る、小、刀、禰、在、下、不、敬、を、咎  
 め、ぬ、も、子、と、く、の、親、を、敬、ひ、弟、と、く、の、兄、を、敬、る、を、忘、れ、ぬ、小、同、胞、年、來  
 疎、遠、不、し、を、使、者、の、憎、み、を、人、を、道、と、い、ふ、を、と、の、れ、て、困、友、驚、か、る、  
 且、く、佐、と、る、人、り、と、あ、る、優、劣、を、汝、が、諫、言、只、一、句、小、刀、禰、を、其、意、を、為、る、と、稱、へ、  
 め、ひ、坐、と、占、ま、珠、之、女、も、退、き、故、の、処、を、ゆ、り、困、友、近、く、招、き、を、目、今  
 汝、が、意、見、の、趣、理、の、あ、る、似、れ、ぬ、も、一、れ、豈、年、來、兄、を、疎、き、胡、越、の、お、ひ、

まことのるるんや。これの総角より比の館の昵近一なりて今るの寵辱を  
 よろしく兄を媚とてくち解られ後がのづら。疎濶ゆもあつるさへ  
 然るをけいひけき。あへ使を置られる。その故をまご知らぬも。目前の利を  
 せ。と汝がひの要をあらぬ具の告よのふや。と問れ。珠之入阿容る色を  
 その美の問せぬも必しもや。あへて一大事。おのひれ抑君御兄弟送不權を  
 争や。快らるるえぬ。いと愚る俺們も。宜れぬとあひび。況心あらん。親  
 此れを歎に疎淡議るも。まはべ。尉の殿の近比の美の御心づきあひ。御  
 御後悔大なる。まはべ。身弟と不和ある。事情を按まはぬ。その初は弟が  
 欲しとひける。遠山松の湯兆と與さける。是等の所以のあれる。今兄弟を猶  
 人の身ある足ある。とて同ト。よも稀る。名番る。とも他人のこれを贈るにあらむ。  
 弟の所望不任。一は猶も家ある等。譬も右も持る物と左も身

る小異なる。まはべ。弟の讐ある。身も禄も。まはべ。立地の小の冤家を  
 撃とまはべ。まはべ。まはべ。の物を惜ま。兄弟不和あり。今更慚愧の堪  
 ざる。汝那首不赴。弾正對面。くち意を告。這湯兆と贈る。よと  
 傳へよ。まはべ。渠のち解れ。と贈の受と。直館推参。入  
 道殿。高。小愁訴せ。然る館の驚。ひく。弾正を論。めん主君論解  
 らひ。渠も。まはべ。必和談の整ん。あ。萬一ののめ。され重立。まは  
 老黨を這使。小と遣ま。まはべ。言改。と疑る。まはべ。あ。まはべ。あ。まはべ。あ。  
 よ。まはべ。あ。まはべ。あ。まはべ。あ。まはべ。あ。まはべ。あ。まはべ。あ。まはべ。あ。  
 請ま。あ。まはべ。あ。まはべ。あ。まはべ。あ。まはべ。あ。まはべ。あ。まはべ。あ。まはべ。あ。  
 奉り。あ。まはべ。あ。まはべ。あ。まはべ。あ。まはべ。あ。まはべ。あ。まはべ。あ。まはべ。あ。  
 舒。言葉の。花紅葉。遠山松の湯兆の。袂を。解披。死。甚。益合。まはべ。あ。まはべ。あ。

之る。さき。切より脩に六尺袖小白の溢る。愛敬の武家の扈從の進退忘  
對柳條の袴の壁積よりも折目正く困友の身邊へやと措けり。有如之  
程の困友の初めは悔る。珠之次、説諭されて且羞且呆は、正半晌許肚  
裏はさやううら兄猛らうち解く。秘藏の名器を贈られ胸中測正吐  
る。疑ふく受収めば、珠之次の御館へ参りて入道殿は秋意訴をせん、熟視  
る。這少年の縹致といふ才といひ尋常ののふらば、不慮小館の初日にま  
ま召使るもゆもあつ。寵遇の害あると、只速し和睦。這奴を還  
まら優てあつ。尋思とく微笑く。あま微妙使の口狀尉殿さきふ  
某に愛をぬせ、知むと不悌の罪にゆる。後悔あら立、持  
秘藏の遠山松を賜れ、受られんと固辞、珠之次推返くと、藤今和  
睦あるとも、這湯鉢と受る。何を證拠仕らん世に、困友の千々の

黄金も辞せると断金の父とて愛に例ふ。のあり、元原は一腹を兄  
弟あやほせ、いん、仕賃とも受も授けもある。然、今ゆ固辞せ  
ぬ。疑ひぬ、歎と詰れば、困友脱る、路る、困、果々額を拍く、寔は  
汝の才子へ介、這遠山松の、尽預り措、何を報ひ進らせんと問、  
され、額を死海を、脚を、る、在下る、信容く、且  
問、んや、果くと思、意、も、わ、報、及、ぶ、ま、この灰、は、わ、  
尉の殿の議も、阿波の二好を招んとある。おん使の身と御同意あり、那  
誤、任、る、見、目前の大利、在下下云云と向、せ、一條、あの、の、  
あと、と、の、困友、あ、む、その亦、汝、の、の、二好、が、御方、小、参、を、  
利、る、あ、む、も、渠、の、脚、説、後、の、の、功、る、の、の、敵、小、柔、弱、を、  
示、る、の、利、る、の、の、と、せ、り、く、問、れ、の、の、騷、が、の、の、

尉の殿の面者と彼地遣りぬて定ふ撈知一召れぬ後三好の不疑なく  
 御誼小後ひまらふとも左界の城を返さし一倘又絆の障ありて左界の城を  
 返さざとも那地小到らぬ敵の強弱を兵士の言察すとも知を還らせぬ  
 既小敵地の案内よく知るとたの攻る小易く渠が由断と淵ふく一挙小左  
 界を攻撃むる小唾く城を抜くべし左界の都會の福地へ曩小喪ひぬひ  
 一と海をひぬる小入るとありぬるもまた利潤ぬゆりぬる。たの美と上小高國  
 むひく絆就と兵尉の殿の獨功ありぬるも刀袷も御感小預りぬひ共小  
 ちの利を受ぬらん。ふれぬるもと同胞合體すはばゆりの憚るがう千  
 慮の一失御同意ありぬ公私の上やひぬるも賢慮を回しぬ。孰く  
 計らぬぬひと利ぬと薦る奸佞の萌ぬる小願れぬ國友も亦貪りぬ飽  
 一と知らぬ性るれば一言毎小との意をぬく感するも大なるは呼奇るるね

少年小早も計畧の意小稱り。翌日めく出仕し件のよと執達見  
 尉殿も出仕し御意を伺ひぬひとこれぬと傳へせぬ。永女曲る翌御  
 館少この年来の怠慢と賠話する元と多の口是は汝が奇才ありぬ。同  
 胞和順合體の這致ひありぬる計る如く那利を分る現愉快なる  
 一且く弟めく致ひの不便と去れぬも兄の侯ぬぬと立之とよと傳へ  
 是れとありぬ。このひにて童届從小持したる刀と牽る物を取らせぬ珠之儀の  
 左右の小小受載る腰小帯び額つた拜し恭しくその致ひを述べけり一談  
 中うな果一と國友の遠山松の湯銚と近習小持し徐小魚は入る程珠  
 のかけと執達の若黨小送られぬ。各々小見真砂路小衝るぬと世と  
 後者も亦く意氣揚々と鞆も夏の天色小卯花月毛折小馬の足掻を  
 早めけの嗚呼軟弱の一少年主家の胞兄弟を相和解と遂小莫逆



未松たまたま



柳本元正

出像第二十二  
珠之使  
去々巧子  
國友小説

る。あつてい忠めく功あふ似る。されその説く所利誘ふ。義疎り。是  
 奸佞の所なり。智あつてのとも用へる。盛衰の急。臨ま。口を敷ちて  
 薪とる。月を塞ぎ。白とる。その傾智即功あふ如。一旦事の要とる。も  
 豈長久の術ありんや。然。那利と會る。為主。後。俱。不測の罪。陷。この  
 る。と。と。と。識者。竊。評。け。問話。休。題。の。日。香。西。四。郎。左。衛。門。尉  
 元盛。柳本。許。遣。た。末。松。珠。之。次。と。俟。程。日。の。名。西。傾。く。比。珠。之。次。  
 其。末。て。那。首。の。趣。信。々。と。問。友。と。問。答。の。首。尾。送。も。演。説。と。牽。出。物。  
 ゆ。け。る。刀。と。う。と。う。と。元。盛。斜。る。を。飲。び。ゆ。由。執。念。深。深。つ。か  
 弟。の。速。和。順。と。阿。波。使。節。の。宿。望。一。時。本。意。と。遂。入。工。督。夏。時  
 大功。呼。ぶ。家。の。諸。葛。孔。明。丹。波。數。郡。の。所。領。と。賞。と。も。あ。る。足。る  
 ぶ。来。世。の。後。れ。後。ま。も。比。翼。の。契。り。と。忘。る。と。る。連。理。の。誓。言。背。き。と。る。

を。依。傍。果。ら。と。接。つ。捺。ら。餘。念。を。罷。愛。日。來。の。所。増。け。却。説。香  
 西。元。盛。の。次。の。日。出。仕。ま。程。の。國。友。の。先。と。那。首。兄。と。俟。て。ま。の。遠。山  
 松。の。湯。鉢。を。贈。ら。れ。た。び。叮。嚀。述。陳。遠。と。贈。語。阿。波。使。節。の。お。ん  
 願。ひ。と。向。め。の。制。め。ま。う。せ。の。も。孰。思。お。の。好。の。黨。非。如。息。命。お。心。せ。と。も  
 敵。の。強。弱。地。理。ま。も。檢。ま。と。の。御。方。の。利。あり。の。を。館。高。國。を。え。あ。け  
 一。御。合。點。め。く。い。誘。の。共。侶。お。君。邊。の。伺。候。せ。那。地。へ。遣。遣。の。仰。め。の  
 下。時。日。を。規。定。仕。ら。ん。と。お。元。盛。終。ひ。と。の。使。の。お。す。よ。り。和。殿。の。心。底。具。不  
 知。ら。れ。て。崔。羅。の。堪。さ。ら。と。と。躬。て。共。侶。お。主。の。身。邊。お。ま。の。の。道。永  
 禪。門。の。席。を。正。と。元。盛。と。招。近。つ。け。前。日。汝。が。議。し。ま。う。た。な。之。好。を  
 一。條。と。ま。の。事。成。ぐ。と。も。敵。地。の。穴。谷。子。の。定。お。知。ら。ん。の。事。を  
 之。を。發。向。と。る。計。畧。を。旋。ま。謀。る。如。く。事。成。く。左。馬。の。城。を。も。復。さ。ら



即這圓の賞とて元盛は賜んぞ勉まふと仰まへ元盛満面笑と合ま  
 君恩と謝まうけり登時囀友膝を進め既小御説は依ると云一日も  
 ぞ元盛と那地遣い願くをのれ時日と程さの世知れ敵に當る  
 緯の障りありさうのやけん然ればより三日と限りて京師と出て根津州を  
 尼崎より乗船せむ日るるを阿波に到るべ勿論隊兵の言ふるは敵疑ひ  
 騷動せん然れども士卒多く路の程も亦危し因て士卒二百名を  
 足らぬとて前より是等の用心もあまやかくいと真実とてま  
 道永禅門領受とて議定小介へ元盛の意を以て速に進發せよ今  
 よろしく吉左右の侯のまゝと促して御教書見遣とていふ元盛面  
 身のあまりて言兼り退しけりまゝとてこれに信ぜし諸士亦の連名答言や  
 羨むもあり或は又防むものまゝりけり然程元盛のまゝ逆旅の準備

志の珠之友とて身小等しく轎子うち乗る隊兵二百餘名を初明  
 比首途を使節の命と稟より第二日とを告げける素より驕るのれ  
 この路まがら民と虐け非法の課役と肩せし苦しみ怨まはとのり  
 宵の守り宿の者若て酒女遊興の晝る音も是も亦珠之友と寵愛深  
 此感ひより海客舎の徒然と慰んとの所為にけり現錦袴と袖小  
 儂艶曲の俗樂は嫉妬靡蔓の害ありと知らむ又粟肉小丹を陳ね七難八  
 珍の飲膳も農夫辛苦の畝と思ふを欲言けれが會れども足らぬ驕る故  
 鄙吝も冠とての猴るる虎の威借る狐の似る這元盛が狼貪  
 張と知るも知ぬも憎もけり行くに遠く程の日の根津州を尼崎  
 ける時尼崎の城將右馬次尹賢と抑件の尹賢の高圍入道道永  
 実方の叔父へける中務丞春供の二男也彼身の為め從父兄弟を親

族るるも。道水れを一方の旗頭あたる。然るも尹賢の這面香西三盛と  
 河波使節の路次云々と京より通達せしむ。とるるゆゑ。あつたのる。渠の管  
 領の權臣ゆく。且國友が見るれ宜く管待せられし。豫て士卒下知しけり。さ  
 れ屬日件の城の修復の工匠奔走し。さるる座席あり。さるる盛不  
 了く二佛山中間寺と云城下の寺院を旅館とす。二度の御食饌美し。盡し  
 香西主従と款待しけり。元盛の地方より速船に乗て。向波渡りんと欲ま  
 る。不知花降し晴間。風雨の為抑留せられし。心もさるる日。弥るる雨。さ  
 る。雲分れ。有頃風。さるる。日々小港口催促し。探尻し。居るけり。  
 有如之程。珠之女の旅泊の徒然と慰難けん。有一日。雨三箇の従者。とて。の  
 身の馬。さるる乗。寺より出。城下の。漫行。と。浩処。前。面。より。  
 竹木。野積。登。たる。車。四五輛。牽。り。過。り。城。へ。入。ら。ん。と。ま。る。の。あ。り。あ。の。處。の。路

陝のれを馬より先遣遣違し。走りぬげんと。程小轡の車の立日高。裏  
 裏裏と地と御音し。迅雷小異る。珠之女が乗る馬。忽地小駭。怖れ。  
 屬強と。と。けれ。主の鞍。も。堪。る。隊。と。り。駐。め。た。る。怒。小。堪。は。声。さ  
 る。奇。怪。多。白。物。ホ。ゴ。り。や。車。の。走。れ。ば。と。武。士。小。對。ひ。て。避。も。せ。し。刺  
 馬と駭せし。これ狼藉小あ。る。者共彼奴と脱。ると。白小似。げ。る。敦  
 圍。猛。く。鼓。坪。敲。き。下。知。を。れ。雨。三。箇。の。後。者。小。美。る。と。心。も。あ。ま。走。の。鬼。と  
 前。る。車。を。推。留。め。つ。拍。擇。を。當。下。車。力。の。夫。役。小。此。も。怯。せ。諸。声。さ。と。ら  
 理。不。盡。何。と。ま。る。武。士。の。あ。れ。公。家。の。あ。れ。城。主。の。法。用。で。推。も。く。車。其。方。の  
 馬。が。駭。げ。ば。と。推。留。ら。る。の。あ。る。妨。げ。を。と。罵。り。と。林。中。を。さ。る。小。推。遣。の。衝  
 退。け。各。車。の。前。後。小。立。く。牽。り。と。去。ん。と。ま。る。程。小。珠。之。女。の。怒。り。馬。残  
 馳。寄。せ。刀。を。抜。て。右。小。立。り。一。箇。の。夫。役。の。小。髻。の。外。と。と。破。し。雖。然。淺。疾

るるる小車力の夫役ハ三人數少一輛毎小四人の五輛合と千許人の夫役ハ  
 其の性どと那研を留めんと諸声烈しく詈散動き車積  
 多來の材を多く引拔ち振て競ひ鬼まる勢ハ不當もあふける珠  
 之乃が後者ホいともい腰ともいど頻大に敷き惱され不捷放せと  
 なる小凶吼々乱走去あ光景小珠之乃も駭怕れ物もゆる馬の鼻  
 つ牽回らと捨鞭拍て逃さけ元盛のとも知らず是時港口小準備の  
 船より順風来るの纜を解くやゆん無れゆと告来ればさると士卒を  
 急し珠之乃を詔ふ物を為飲馬小乘て城下のへ出さるがも還らと  
 彼え小余ら途ゆくあはる衣皆出ると焦燥て居るの士卒と別立後小  
 從へ旅館とゆきと工のまゝ幾あるまされ前面より馬を飛して來るのあり  
 是則別人をも珠之乃主役が那夫役ホは趕敷かれて逃てあま來る髪

短髪のをれ髪を振放されその為体の慌げる小況二箇の從者も  
 薄瘡淺癩を肩ぬも流る鮮血と拭ひゆと後走中走著る然程小  
 珠之乃の遠く馬も降てまのほとり跪目今あるのてひの故の箇様々  
 と城の夫役の車力ホが狼藉の緯の趣彼もあふり身非飾入を  
 外めて言語巧小告る元盛の勃然と眼を睜り齒を切りとそいあふり  
 其の維城の夫役も皆領家の使と奉る元盛が後類を打擲せ  
 一言語同断の尾とも忍ぶる武士を甲斐もあといれん遠くも  
 趕鬼て敷の留めと声も烈しく下知れ悠雄の士卒存一応て或は前  
 或短鎗各々武器を引提て逸足踏で馳んとまはる珠之乃の氣を直力  
 つてゆま馬も先進を舊來路へ其馬直小乘返ま案内小衆皆  
 後れと街衢と投て走るの再説那夫役ホの珠之乃主役とあはの隨小

赶走らんと故所小立集合し更小又車を推てゆくといふまゝ十町小及び中向寺に  
 方より一客柱をせし一隊の武士の數凡二百ある是方と望て趕近づく夫役  
 等存一入るべく彼正那少年の一箇隊を武士もん原來屬日中間寺の旅  
 宿をせし方京家の人々きけるを捕籠られてのまへへ逃れしを討つと  
 車を棄て城のくえ走り躲れんとほ程元盛の士卒亦の透りあを吐き  
 遠方の竹前を射半近は短鎗見ゆくと矢庭の四五人突伏する見ゆと夫  
 役はひく怕れて西走り東へ脱れむ往方もあはれなき有如之も元盛の怒  
 氣を感盛るけれ士卒亦下知し件の車を推並火を放さ竹木共焼棄  
 けのまは不聊慰めく今いも是まて又殿をいふふまうまは恨るはあはれども  
 とも續て解くといけの須風はまらぬとまの阿波へ渡海し功成名遂と  
 又さ小て必しひきとせんぞと飽まて罵りし珠之次を慰め士卒と後港口に於て

急がら準備の伴舟二艘の士卒亦分乘りしその身の船は珠之次と  
 近目ものけを果らんと管絃を奏し酒うち喫し稍熱腸を冷せし笑ひ樂  
 し酩酊して寝るとも知らぬ珠之次が膝を枕臥しける案下某生再説那時は  
 撃漏される夫役亦辛く城中逃入し即緯の趣を信々と訴る城主尹  
 賢よりとて家臣を城外に走らし且元盛を去る系那人々を折れ港口  
 赴は船小乗て士卒も俱小漕出されぬ夫一人も送るものいふと入會ひける  
 ようと撃れらる夫役亦亡骸を檢る小地方の者のいふも那訴小違ふとる  
 元盛が權小誇りし車を燒棄れ城主を恨む罵りしものもその時定ふは  
 えりとの元盛をむとるし然れども元盛の城小更の乘て有ける  
 随小報ふける尹賢これをうちて腸を断可る慍然不堪なりしはくと思ひ  
 元盛の管領の並第恩顧の權臣あり使節の命を稟るを今私の怨を

のて較果一まその外見亦ふる不係るべし然とよと訴く。謙断法請  
 まうまとの元盛の弟を柳本國友と入道殿の寵臣を渠が為す諷  
 言せられく。還て不測の罪をゆん抑元盛國友が年来民を虐けく。驕次言  
 ほを入道殿とるは曉得らる。國家の大事を任し下情通せむ然る  
 の言る勢ひの如くこれ怨を秘して謀はふ不如と深念とる夜とる  
 日とる思を潜め枕を推れく元盛を亡去死計策をを旋けける。

第十八回

諷を信しく道永嬖臣不誓の  
 怨を秘しく尹賢香西を陥る

話表右馬次尹賢不仕へる矢野宗好といひのあり原是阿波人氏  
 むく三好希雲の右筆より希雲の高國を殺され比との身の尹賢不  
 降参しくと正首不仕へる初阿波不在り時執筆と宗とてはふよる。

大約三好の黨の花押印章と写し覚え此も違るこゝろ折々人小説  
 誇りて尹賢の不圖多しや。ある究竟と獨悦ひ恥て件の宗好を兩室に招  
 上る。東西多く取らせり元盛を亡く怨を復さんと計し候とて送むわく  
 身死示しく三好が元盛は合る書翰の偽筆を書せける既しく宗好は主命  
 黙止がさる。思ひみる見賜のヨリとて飲びく一談及ぼせり。随不件の書  
 翰と書目寫ゆ左界の敵將三好越後守勝時并嫡子左衛門佐勝長等  
 父子連署の花押を此も違へを贋へをけむ。尹賢望あふ足りて飲ふこ  
 大なる。却説あの比尼崎多獄全の中を較系れる偷見あり原是左界の  
 人るれば尹賢これを用ひんとく。獄長ありる。その宵奥庭の牽居さく  
 尹賢竊に這偷見ふひや。汝が罪過重ければ首を刎死のるまとも。密  
 計の後ひく。左界の三好勝時が。間謀者と陽倡へく。這回京師へ牽き。

これ又竊の計ひくは放遣せられたる故の恚々として香西元盛とてえと計  
 較して意中の機密を詳し其示其件の偷見致ひ兼て命助り何  
 まれ仕らん左も右の計せあると云ふ尹賢も欽びて以て死を誨まると  
 怪しむるも客の打粉して更ふ又取系く綁めその詰朝士卒の牽きみづ  
 る京師の走陟り高田入道道永の邸に到り對面し請きて左右の人を  
 遠ざけ側へ寄り其く其く杖も香西元盛の莫大の御恩を仇として叛逆の企  
 む。渠が阿波へ赴き船出せしを黄昏の怪げなる旅客を城兵が捕捕  
 せり。其の緊しく責問せしむるに懐の密書あり。好越後守勝時が左界の  
 城より密使として元盛に答ふ状あると云ふ。懐の密書は偽書と  
 して、かく道永の膝のほろゆりおられぬ道永禪門驚死取り取揚て披けり。其  
 書を略れ去逆帰順便是勇士所庶幾足下近内應本

州討滅道永法師將令聰明丸故管領源為管領來翰  
 披閱幸甚幸甚然山海脩阻猶隔靴搔癢也因本月  
 渡海事企望稍久某以戌左界身不得預其席遣愚  
 息勝長欲舒來會之驩尺素不易盡言聊以布親串  
 大永五年戊辰夏四月日越後守三好勝時左衛門  
 佐三好勝長等再拜香西左衛門尉殿とあり筆談と云花  
 押と云疑へくもあはれ道永禪門呆果てて悉くこれを讀復しつゝ  
 息と吻と豈料もや元盛がめる逆謀あると云ふ敵の使ひいふを  
 さし緯の證入するものと云ふ牽せむとのへ道永領なき人ら我當兩窺し  
 そのいふより驚くべし庭上へ牽せむと指揮し尹賢あろゆり遠侍の退る士卒に  
 かくと命つけん舊の席小著程の尹賢の士卒兩三名那癖者を牽り來

縁頼近く推居る登時尹賢進寄て癖者より対ひて罪人知らざるの然  
 管領の御館尾崎中首伏の趣を又云下管領はせんとて翠簾の那首  
 どもをどのひも目注され癖者のやあろゆめりる少の幾遍も回す毎  
 いのぎらんや某下雑兵よりふとの具るるを知らねどもいぬる比香西殿より左殿へ  
 密書を贈られたまはるの回報とせんとの主命を受く尾崎る旅館を来に  
 けれど香西殿の既ぬる渡海の船に乗走りて宿をよけれ勞と功る帰  
 去らんとする折巡郵の兵士より怪められ生拘られ呵責の堪は首伏の趣  
 前後違を命運の場は今中ら波濤を愛惜せんやとなく首を刎ぬ  
 覚期極めくいと云怯もせぬ勇氣の辯舌道永禅門竊聞と尹賢を招  
 近つけ今癖者より所那書と吻合せうへ元盛無逆謀疑へんとて  
 ども好ホが友回るらんも測ぐりよるそ那癖者且く和殿不預措んを

尾崎へ牽りて取りて元盛が帰帆を颯ひ方便とて一箇も漏る皆生拘て  
 注進考め必條りて殺せんとし尙又元盛帰帆の日船を倍一敵を隠して  
 城を襲んとするはとあふ渠を陸に降するこも推捕籠くあれ殿も  
 加勢の軍兵四五百名を此方より遣え和殿の多く立取りてとらの准  
 備肝要とんと潜す小示される尹賢欣然と命を兼暇を請ひ士卒小  
 癖者も牽退しくその身も續は退りけりその日柳本弾正國友聊恙  
 わりけり終日宿所臥てり故に尹賢の密訴のよりを知らねども道  
 永のさるやうさま渠が事を想像る元盛誅滅せられ國友も又これを  
 恨ま必他御立退く下縦逆臣を討滅しく京師の益為不治るとも相も  
 押さる國友別をその哀し由要をあれと深念とて多づる七百の  
 誓誌をのりて神文不血を沃びを渠が出仕と俟しふその次の日に國友が

病著をき、瘥りて己の左側小出仕せし道永禪門鉄びく故意閑室小  
 在りて對面し。その尹賢の密訴の趣緯悉々と説示して三好勝時勝長  
 ホラ元盛おろしとの密書と取出るを尹賢驚死且怖れ。席を避  
 け罪を請ひて道永さへ慰め。ゆるみ身邊小招近つ。元盛野心  
 ありともこれの餘は疎意あらむ世在る限り等しく存命死る共侶と  
 のみとふる。誠心を知らせん為寫め置たる物をあれ後々までも證據あり心  
 ばらむとひびとあへも尉めく件の誓書と取りて尹賢の稍安堵と謹て  
 披死する。這回元盛叛逆の事より連坐の罪を肩へ負。吾身の天雷小  
 敷も碎まむ。死と冥府の呵責と稟んるのう一毫も食言あら日本國中  
 大小の天神地祇氏神八幡大井云々と書ある。神文小血と沃たて。あつ  
 るひと。七頁ありけむ。國友ひさく戴冠拜しと感涙を押し拭ひ君のまは流るる微

臣と思召し。洪恩九の世と易るとも報ひし。る小足し。あへ一兄のけり九  
 族を罪するひのふりあつともいそ。叛はすつらん。いそ忠勤と抽て國家は替異を  
 掃りてん尊守慮する。惱ひひとと言美とまら。う。道永禪門怡悦小勝は。さ  
 の尹賢小約束あれが加勢の士卒五百名を尼崎へ遣ふ。この美と計ひ  
 ひとく世小隔る。主命小國友のころ異議と死。兼り退。猛小軍兵を  
 鳩めよ。尼崎へ遣。有。程小尹賢へ尼崎へ立。快。船  
 既準備あり。且兵士の部と元盛主役帰帆せ。脱。下。知。け。  
 既中々京師より加勢の士卒も来ふ。け。尹賢。後陣と定め。港。只  
 方小隠し置。元盛。今。と俟。の。け。話。表。更。題。香。西。四。郎  
 左衛門尉元盛の渡海の船中異なる。阿波洲小著岸。那城小到  
 んとまる。程。三好筑前守元長。の。よ。と。老。黨。と。召。集。め。高。國

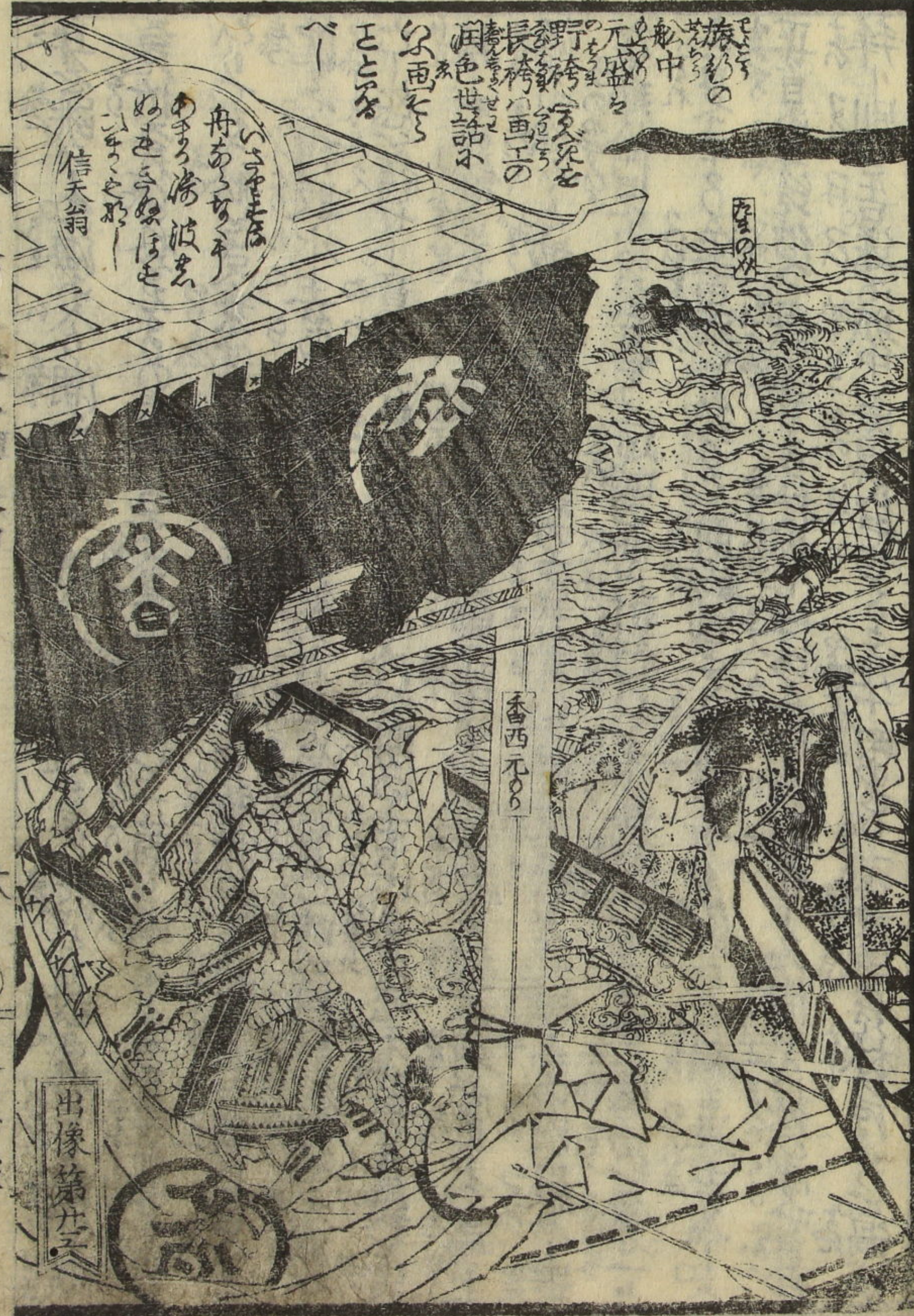


入道道永いりどうどうえいのりも大父おやの寛家かんか之況いきさつを家臣けしん元盛げんせい民たみを宥なだげ驕あごを極たぎる島  
 嶺たかねの小人こじんるもの招待まねがひの使つかひと稱なづくゆ一ひと来こされしを奇怪きがいるれ汝な木き士し卒そつを  
 おく路みち駭おそれ推駐おしゑめ速すみ小追返おしひら返かへ去さへ異議いぎ及および一箇ひととせも漏もれぬ敷しと番ばん末すえよ  
 と下知したちせらるる好このが先ま當あるの意いをゆるく軍兵ぐんべい多く後あとへく港口みなとを望のぞみ走はたり  
 けまぐ元盛げんせい升陸しやうりくしとま二宿ふたしゆくも歴かざりし好このが士卒ししゆ小捕ことら籠かごりまて一  
 歩ひとも進まむむをゆるそ隊たいの大將おほしやう三好さんこう孫そん六郎ろくらう秀ひで一馬ひとまと兼居かねい声こゑゆり立て  
 本もと西にし元盛げんせい慥たつ小ゆけ汝なが主ぬしる道永どうえい法師ほふしの嫡家ちやくけと追退おしひりて管領くわんりやう職しやくと  
 横領よこりやうし又許またゆるを行なす吾先君われまへきみと害がたりあどりて元長げんぢやう主阿波あはの御所ごしよの  
 公達こうたつと將軍しやうぐんあるなり故京こけい北澄きたさやう元朝げんてう臣しんの嫡男ちやくなん小御座こみざ主ぬし聰明ちやうめい九く小管こくわん  
 領職りやうしやくと紹しやうしあむせんその軍議ぐんぎ小暇こあひまる折せりり使節しせつと倡なげへく推参おしませし  
 此地このちの容よう子こを知らず欲ほまる反間はんかん者ものゆせあしんせし比皆ひた悉しつ生拘なまく頸くび袂たもと

別わかて奴原やつらまれども汝ならむ如ごとく半宵はんせうの小人こじん幾いく百人ひゃくにん敷し捕とらとも又何またなには無なし  
 あんそつ伏ふ小追返おしひらせとあ寛仁かんじん大度たいとの下知したちゆりて三好さんこう秀ひで一馬ひとまと命惜いのちを  
 くいとく去され異議いぎ及および目物めぶつをせんゆあむと呼よびてその隊たいの士卒ししゆ二  
 四百しよひやく名用なもちを揚あげ籠かごと敵たてを素破すやとゆる射やりしと素す亦またとゆるもまらり  
 けれ元盛げんせい大おほく駭おそれ怖おそれて陳謝ちんせの辭ことばと重おもきと秀ひで一ひといそをれと聽きく先ま庭ていま  
 追立おしだ馳かせと港みなと只ただ推戾おしせ元盛げんせい又また絶たゆる珠たま之の及および目め注つし之の俱ともあ  
 船ふねあを無なりおける況いきさつや百餘ひゃくじゆ名なの後者のちのちの主ぬしより先ま小族せうしゆく々と命伴いのちを舟ふねの  
 衆しゆて纜つなと解と帆ふしと揚あげて初はて息いきづけおけり元盛げんせいと豫よより計けいすし又また画餅わひやくと  
 ろりし且かつ羞はれ且かつ怖おそれく何なに月つき安やすくは雖然しかん弟國ていこく友ともの資すけあれ執成しやくぢやうと主君ぬしきみの奴やつら  
 正ただと和解わいげせせん空からうまき還かへらんら播磨はりまの室むろ八はち船ふねと駭おそれとこの土産とちさんを  
 買集かひあめ京師きやうしの畏おそれまされしと遂つひ小播磨こはりまよ封ふうして室むろの津つは逗留とちりゆうし東西とうせい

常々買取を更一艘の船を備え積登たるより初の二艘をける船の  
 是より一艘殖りける。又程元盛珠之友と密談し尾崎小判とも又京師  
 此の事も實告りて人々の心をもどし後者小判一口と合して今更と此の  
 尾崎を投て棄てたまふ。日順風は己の計及船の港口入んとて  
 程小忽地暗霧の烽火と争く。一道の天気が沖を衝きその声耳邊に響く程  
 してわれ居るの快船潜頭れて二艘毎小二十餘名の兵士が前短銃を推し  
 その勢無慮二三百人元盛四艘の船を八方より捕籠て逆賊元盛と出ぶ。  
 波の好内応と敵と誘入れ為那地使節とひりて阿波小赴に密談  
 老の伎倆既小非覺なり。其の故小管領家の下知より波の帰帆を俟  
 正既久し小覺期を異口同音小罵り罵り。其の勢捕を競ひ鬼は  
 元盛亦復駭慌てる。其の事何れと云ふ。其の船窓より半身と頭をく

人々をこの修のあき某素より野心得。其恨もあつた。諷言ふをあらぬ。其の身  
 京師小赴に。鮮はく。等ると叫ぶ。討むの事。十小の。聴かぬ。  
 思元盛汝の船二艘あり。其の數多し。敵の兵士。障。無。その證  
 据分明。の。を。諸声高く罵り。其の勢。打ち。無。程ら  
 んと聞ゆる。勢小制む。も。元盛主後。且。且。船を  
 水際小寄せ。と。陸の方。大将尹賢。京師より。差来。され。加勢の士卒と  
 後。も。射。前。透。間。存。元盛主後。度。失。射。水。論。ま  
 元盛水陸の討む。為。捕。籠。られ。免。れ。か。り。あ。る。船。を。潜。返  
 して。澳。の。敵。と。戦。後。氣。憑。る。癖。を。あ。つ。た。る。も。多。く。二。百。餘。名。の。後。類。の  
 送。り。宣。券。を。捕。ら。れ。その。身。も。數。人。所。重。倉。を。負。て。音。首。捕。ら。れる。中。小  
 珠。之。友。の。戦。に。危。く。な。る。折。上。衣。袴。を。脱。棄。す。て。來。の。板。子。と。搦。抱。船。上。を



舟あつちや  
あまう浪波を  
ぬきては  
信天翁

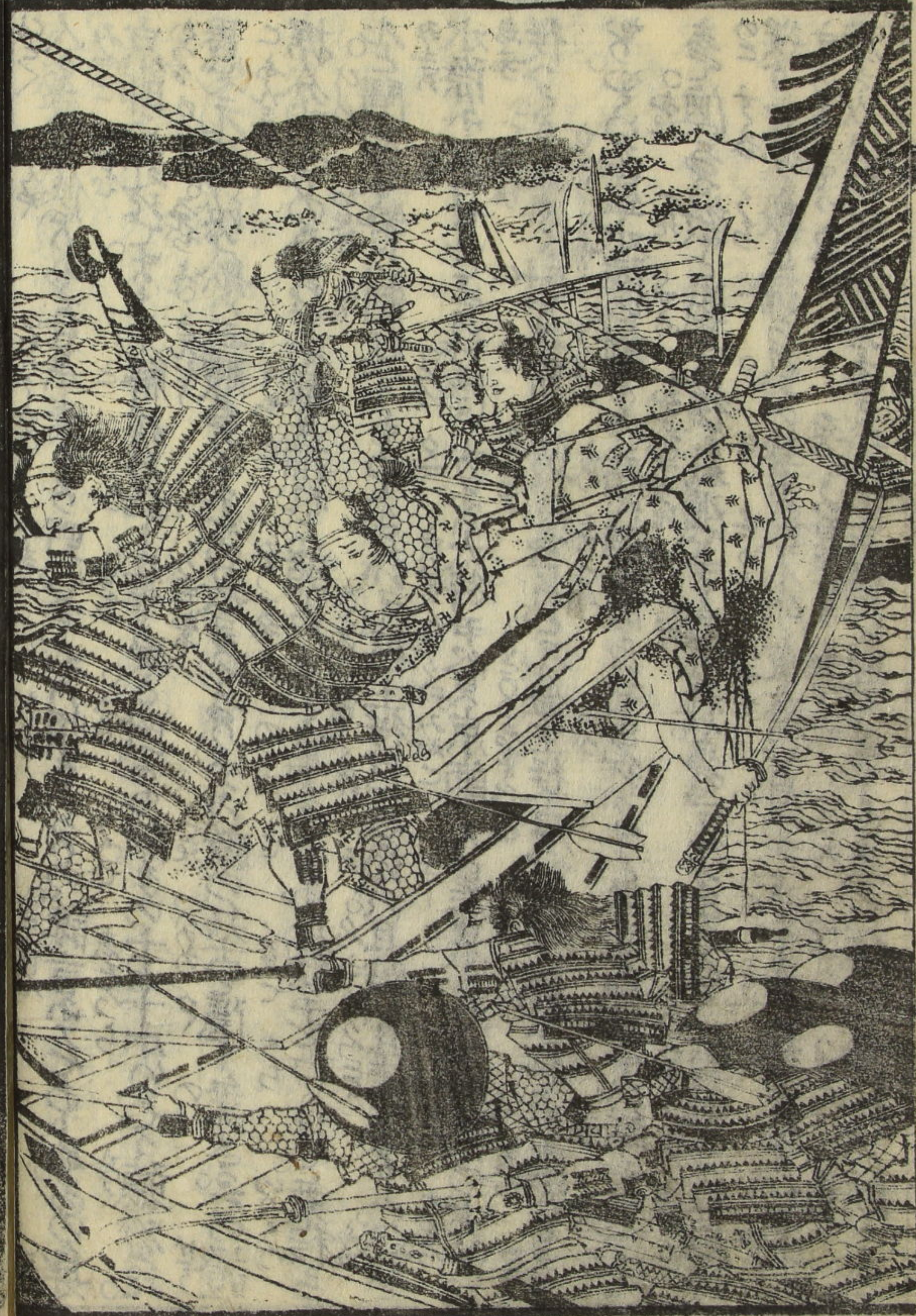
旅の  
中  
元盛  
野崎  
長崎  
色世話  
の  
と  
と  
と

香西元り

出像第九

美しき舟

大  
十  
月  
廿  
日



美しき舟

大  
十  
月  
廿  
日

身を跳りし海入り潮小作く浮り沈み流るる然とも討たれ兵士戦ひ暇  
 る折られぬをそのあまなる香西が後類と二箇も漏らすとる競草や勢  
 ひりて船と交乗沈め室の津より備れ来たる物積船も共侶打破らる水小  
 沈み楫取水主も敷られけり然右馬又尹賢一時の奸計行れて元盛を  
 亡然復せし意中の歎ひの事もあは加勢の士平上りして元盛が首級を実  
 檢しその餘重なる首級共も翌京師へ附せんと士平と纏は列を正し馬に  
 優れ徐々と城中へ還りたるその夜尹賢の矢野宗好とて獄舎の内小敷に置  
 たる那偷児の事を尋ねてこの密計行れて元盛滅亡するの故功を第一と  
 せし是より金百両とある前約の事放遣ると仰らる竊は逃去るべしと  
 要旨の耳を傳へて獄舎より杖出一件の金と遞せし偷児の怨受て因を  
 拜し別王還る城中へ潜り出せむと九十町あり一叢敏林の原より過ら

とまる程小忽地後方小弦音高く一條の征箭蜚來るを偷児を射倒し  
 けり灸所の深痕よりれ叫びも仰及て血の塗れ々息絶る此是尹賢の豫て  
 計りしゆの件の偷児を助け措く渠より密謀漏れ身禍ふる事とありえ  
 竊殺しと根を断しと尋思をう矢野宗好の謀計を授金と齎し一旦渠を  
 放遣りて途ゆくぬの敷せし有徳者矢野宗好の偷児の武を接ぐ林の中を  
 これを射殺しその頭を捕り件の金もとり復して城中のつらま竊み尹賢は  
 元盛の尹賢即賞禄として金を宗好の取ら各けり是より先尹賢の腹  
 心の士平の下知して這回の送恨の元盛が龍陽珠之友とあり奴より事記りたる  
 よりるれりの少年とて元盛の一箇も漏さる敷く苗よと竊み命にふりあり  
 事果てその屍をこれ彼と檢する元盛扨後とあり死の西箇もありける知る  
 めの事とて向よる妹之友ありとて然とも陸の戦ひるる脱れるの事と

とも覺えをまろく水中に破沈めみづう海に飛入り死するものければ珠之儀も  
 入水し疑ひありと士卒ホが皆のよより尹賢も然あらんとして遂に  
 素も己のけり却説その詰朝尹賢の加勢の士卒共侶の京師に降り道永に  
 見参りて元盛伏誅の下を演説し豫ての擒めさせよとの仰を受けんと  
 渠の二好が隊兵と別船に隠し乗せし初め倍を多勢あり元盛主役必  
 死を極め強く防戦ひ多敷く漏下とせしつこ工を以て皆撃果一と  
 首級を齎しゆ又奮生拘りる三好勝時ホが同謀者の戦ひ果一を夜  
 獄舎を破りて逃亡せし雜兵ホが赶蒐く敷く留めたとすうまふも那  
 奴が首級も持しおれやその餘の者の云々と報て実檢し入れし道永禪  
 門詰ふよきその有功を賞するも又柳本國友の主の誓書不感服し  
 辱しと思ひ事虚実を召問りて兄元盛を討れし聊も怨とせし還て尹賢を

勞ひたまへ尹賢のよふ優る緯十二分の首尾とて身の暇を賜り尼崎へを  
 引ける叔も香西元盛大く驕る任人る多し不測の罪小陥りて後類と俱に  
 亡びしは宜かしの所なりされ又尹賢も諺を行く私の怨を復し又密計を  
 行せし倫兒を斃殺しその隠匿を漏すと底深く計りて是戦世の  
 悪俗の奸詐の長う情状をの本元と推し道永禪門理義不暗く男色  
 龍陽の惑ひあり柳本香西ホの任人を親愛とて國の大事と任したる員官の  
 沙汰の致す所一人貪戻るるゆせし一國を亂し魚さやの後は好長慶義長  
 陪臣のく主と制し世國命を執るる至る是の緯の張本を案下其生再説  
 末松珠之友の暴小討りの大勢を捕籠られく主役危窮小及び折免れ果  
 トと思ひかき板子を抱入水し潮に任り流るるを知らず身の  
 最大う疲勞し心地死ぬく覺し比磯打浪を揺揚らしくあのを濱邊の

寄たけけまが板子と葉と臂近き岩ふまをけ取留めが忽然と息  
 絶く小后の心と知らず助る人のなるともあふ絶せぬ命根なりけん  
 づゝ甦生やと四下とるふ小日の暮たり何國の荒磯を知らず水  
 飲まざる腹の中尾刺め死と苦み堪ゆけま岩頭の腹を押し當て頭を  
 低く推し程ふ野しく水を吐死しよるやうな復りし事も事原浦の  
 苦屋ものく夜半の月の鮮明なる単衣の潮垂まじ掻きと彼此  
 と絞るふ力死のめり五月の初旬の袂涼く凌ぐ易り人家  
 あり方ふ赴死くあふ敵地外嶋外地方の名を詠言へく一椀の飯も  
 をめとく月を燭の覚束るも人家を索して延りけり畢竟珠之次は遠海濱の  
 流寓く又甚麼る話説りありと次の巻の解分るを聴録す。

近世説美少年録第二輯卷之四終

